

第6回 文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会

平成19年4月18日(水)

【講演者】 軽井沢には私の家内も戦争中に大変世話になりました。妻はピアノをずっと習っていて、汽車の切符を買うのも大変な時代に軽井沢までずっと通って、ピアノを教わりました。

軽井沢には当時から音楽会をやるときは、あるホテルの食堂を急いで直して、音楽会を開いていました。それは音楽というより、ひどい残響の音ばかりを聞かせるようなことで、私もいつも聞いては、ほんとうにひどいと思っていたんですけども、妻が、退職金が入ってきたら、それを全額寄附しましょうと言ったことから、ホール建設の構想が始まったわけです。

ほんとうに残響が美しいホール、これはもう五角形しかないとは私は信じていました。

日本はどういう迷信か、シューボックススタイルというのが非常に多いです。ウィーンの本音楽フェラインというのはシューボックスの建物ですけども、要するにウィーンの本音楽フェラインのホールがあるところというのは、地形がそういう形をしていて、ほかのものを建てることができなかつたからシューボックスにしたわけです。しかし、シューボックスにして音を汚くしないために、彼らは人間の丈以上の彫像を両側にずっと並べて行って、音を乱反射させる。それから正面にはパイプオルガンのパイプを並べて、そこも乱反射させています。

そういうことで、建物というのは、ある残響がないと演奏者は全然演奏しにくくてしようがないんです。

軽井沢の音楽人口というのは、300人から350人がマキシマムだということを町長に言われ一番悩みました。それではホールが小さすぎてしようがないから、建設会社の方に800人のホールの設計をするように頼んで、建てたわけですけども、大変心配でした。ある音響デザイナーの方が、ホールができ上がったときに来て、音響を計測して、「驚きました。こんなにきれいな減衰特性を持ったホールというのは日本中にありません」と、やはり五角形というのは、そういう意味で非常によかつたんだなと思いました。

五角形のホールができ上がって、今年の5月で丸3年たつんですけども、このホールは驚くなかれ、初年度に年間220回音楽会をやりました。

しかしよく使われているというのは、ホールがよかったということもありますけれども、あと一つ大変な援軍となったのは新幹線です。要するに、今どの音楽会——全部というわけじゃありませんけれども、5月の初めに私が指揮する音楽会は全部売り切れで1枚も残っていないんです。お客さんがみんな東京から新幹線で来て、そして駅の裏側にある、アウトレットでまず皆さん買い物をなさって、それを駅の一時預けに預けて、それから音楽会に来て、終わるとそれを引き取って帰っていかれる。つまり東京のお客さんが非常に多いということは、我々の頭の中には入っていませんでした。今になって考えてみたら、1,200人くらいの収容規模でつくったほうがよかったんじゃないかと思うくらい音楽会の切符の売れ行きがいいんですね。

今、いろいろな音楽会が行われて、これはクラシックだけじゃありませんで、ジャズもありますし、それからいろいろな音楽会が行われています。最近では軽井沢のブラスバンドが何組かできたんです。そういうような効果も出てきました。

私が初めソニーから退職金をいただいたときに考えていた以上に、このホールというものが軽井沢の町を変えてきたような気がするんです。この5月にまた開業2周年の音楽会を開くんですけども、Aクラスのホテルはまず満室になります。それから、このホールの近くにあるBクラスのホテルですけども、そちらもいっぱいになりますし、そういう意味で軽井沢全体にいろいろなメリットが出てきていると思うんです。

ザルツブルグという町がオーストリアにあります。このザルツブルグの音楽祭のときは、例えばベルリンフィルは必ず毎年2回音楽会をやるんですけども、そのベルリンから来た人たちがザルツブルグに着くと、みんな四散しちゃうんです。どこに行くかということ、みんな民宿に泊まっているんです。それで、音楽会ときにはベルリンフィルのメンバーが民宿のご主人と奥さんを招待したり、町自体が雰囲気を変えるような現象が出てきたので、何とか軽井沢もそういう意味で、町の人たちが大変に、民宿というものをぜひはやらせたいと思っているんです。

日本人というのはなかなか、プライベートのうちに赤の他人を泊めるという習慣がないんですよ。しかし、ザルツブルグに行くと、ほんとうにザルツブルグのホテルだけだったらあれだけのお客を収容できるわけがない。それがそういう民宿というものが非常に普及していて町の夏の音楽祭を支える大きな要素になっている。そういう意味で、この町にもそういうようなことが定着したらよいなということを考えています。軽井沢のいいことは、何としても空気が非常にきれいなんですね。非常にそういう意味でも、私があの方に

このホールを寄贈できたことというのは大変によかったんじゃないかと思います。

ちょうど時間でございますので、皆様方からのご質問にお答えしたいと思います。

【座長】 ありがとうございます。委員の皆さん、ご自由に発言をお願いします。

【委員】 2つお聞きしたいと思います。五角形の音響がよいということ以外にご注文をつけられたところ、色とかデザインだとか、ロビー周りだとか、あるいは建物以外のところでということと、また、音楽会のコンサートをしていく中での企画、こんな音楽は遠慮してほしいとか、あるいは、できればこういう企画が望ましいだとか、運営面でもいろいろなご自身の思いとか、ご注文というようなものをどんなふうにつけられているのかなというのをお聞きしたいと思います。

【講演者】 つくりましたときから、これはクラシックだけの殿堂ではありませんということで、まず、5月にはまた設立記念のコンサートがあるんですけども、それでも必ずジャズの大家を招待しています。日本の一流のジャズ界の演奏者に来ていただいて、ジャズでホールを使っても、これだけいい音の場合には非常に耳に心地いいんですよということを皆さんに知っていただいたんです。音楽というものは、私は実はレコード会社の経営を長年やってきまして、クラシックというものにぶら下がっていたらレコード会社は成り立たないということを絶えず言いつつ、いろいろなポピュラーのアーティストを一生懸命育てて売り出したことがあります。

【座長代理】 日本の町は、やはり文化的、創造的な産業でこれから力をつけていかないといけないということがいろいろなところで言われるようになって、今ご紹介があったような音楽ホールが、一つの町に大きなインパクトを与えるということは非常に大事だと思うんです。

実際に軽井沢の場合には、このホールができて、町としてもいろいろな、クリエイティブな雰囲気ですとか、文化的な活動が盛んになったり、町に対するインパクトというのはどういったことがあったんでしょうか。

【講演者】 こういうことがきっかけで一流の音楽家が次から次へと来られる。そうすると、そういう方たちと一緒に食事をしたり、いろいろなことでつき合ってくださいんですけども、やはりそれが非常にプラスになったのではないかと私は思います。最近、軽井沢という町が、あのホールだけであれだけ変わったのかと思うような変わり方をしてると、私のうぬぼれかもしれませんが、やはりあの寄附は大変効果があったなと思います。

しかし、お金を町に寄附するというと、町がそのお金で建てますというのが普通の町だと思うんです。それを町長さんが「税金のことなどもありそれでは高くつきます。大賀さんが好きなように建てて、建物で寄附していただませんか」と言ってこられた。ほかの町じゃなかなかやらないことだと思うのです。

そういう意味で、しかし、依頼した建設会社さんに大変いい仕事をしていただいて、日本で最高だと言われる音響設計の先生にも協力いただけたことはよかったです。

【委員】 2つほどお聞きします。軽井沢が音楽的になってきたとおっしゃいました。日本の音楽文化のこれからということ、どういうふうにお考えかなということをお伝えいただきたいのが1つと、あと、企業経営と、音楽芸術を形成されるという作業の違いと共通項との2つについてご示唆いただければと思います。

【講演者】 日本全体の音楽文化をもっと上げるということは非常に大事だと思いますが、私はまず軽井沢が変わっていくのを見てみると、やはり一つのところで成功すれば、そういうようなことは出てくるでしょう。でもやはり一番大事なのは、行政の長がそれに対してどうあるべきか。ということは、我々がまさか人のところに出かけて行って、行政の長に、こんなやり方じゃだめだなんていうことは言えることでもありませんし。だからそういう意味で、軽井沢がすっかり変わったということは、非常に私はいいい刺激になったんじゃないかと思います。

あと一つ、私は60歳まで音楽活動から完璧に離れていたんです。しかし60になったら、みんなは退職する年齢なんだからやってもいいだろうということで、指揮を始めて、音楽の指揮というのは音楽をどう感じるかということが一番大切であって、指揮する技術だけというものはそんなに大したことじゃない。そんなこと言ったら怒られますけれども。やはり一番大切なのは、音楽に対する感受力をどう磨き上げていくかということだと私は思っています。

【座長】 一つ私のほうからお聞きしたいと思いますけれども、財界の方がこういう形で文化にドネーションされるケースというのは、日本ではわりあい少ないですけれども、日本で、文化に対する財界の方のドネーションを増やすというのはどんな方策があるのでしょうか。

【講演者】 私は、今後も今のような芸術大学をやっていたら、失業者養成所になってしまうと言っています。今世の中に音楽家がたくさんいて、その音楽家たち全てが、音楽だけで生計をたてていけるかというと、なかなか難しいというのが現実です。ですから私

は逆に、何で音楽大学が経済学部をつくってはいけないのかと言っているんですね。

今例えば我が社で見ていると、リサイタルができるような腕前でピアノを弾ける社員がたくさんいます。その人たちは、音楽大学に行くなんてとんでもないと親に言われて、だから、それぞれ東大に行った人もいるし、京大に行った人もいるし、それから一橋に行ったのもいる。そういう人たちが、会社で音楽会を開催すると、参加希望者が殺到して、オーディションを勝ち抜いた社員が演奏しています。私はそれを見ていて、これからほんとうに経済学部があれば、親は安心して芸大に送り出すだろうと思うんです。音楽家にならねたら困ると思うから他へ出したのに、立派な音楽家に育っている。

それをやはり逆に、そういうすぐれた学生をこれから集めるためにも、芸術大学経済学部というものをつくったり、法学部をつくったりするのがいいのではと思います。

それから、開発行為も含めて、地方公共団体等に対してですが、企業の方が進出しやすいような形をもう少しとっていただけるといいのかなど。また、税制の問題がございませうね。寄附行為に対して税金がかかるということが何とかならないかと。

【座長】 これをもって最初の講演は終わりたいと思います。ほんとうにありがとうございました。

【講演者】 ありがとうございました。

【座長】 それでは続きまして、光のデザインのお話を伺いたと思います。よろしくお祈いします。

【講演者】 日本ではライティングデザインという職能が芽生えて、もう既に半世紀近くなっております。

我々が今までやった仕事はすべて、高くコンセプトを掲げて、真摯に仕事を詰めてきたつもりですけれども、結果として、大きな自分の目的がいまだに達成できていない。

きょうそうこういった光の魅力が、より増幅感を増して影響力のあるものになってもらいたいなと私は考えております。

さまざまなプロジェクトの中で、光というのは単純な機能だけではないんじゃないか。今、実は技術的には可視光通信とか、デジタルの世界では光の中にさまざまな情報が乗りますと。私はもう少しアナログで、メンタリティーに響く創造性の中で、光というのはもう少しボキャブラリーに変わっていけるだろうと考えております。

私は1992年に京都で独立いたしました、そのときに京都光構想（光による先進文化都市の再生）を構想し作成しておりました。現在、新たに京都の景観の条例が、建築の

開発規制としてさらに厳しいものに改められました。町の景観を保存、保全しようという新たなスタートが切られたわけです。

当時私が光の提案をした中で、この先進都市としての物理的開発と伝統継承を中心とした古典的京都という姿がどう共存できるかということテーマに提案していたつもりでした。同じ空間のキャパシティーの中で、美しい都市景観を維持するには新しいビルと古い寺院というのは同居できないものです。

であれば、それらの機能を共存させるためには時間的に空間を区分する必要性が生まれます。昼間は近代的な都市が機能し、夜はまったく異なった文化都市が出現します。この機能性は、視覚環境が非常に大きなウェイトを占めますので、夜は人工的に光を構築しないと先進都市として機能する空間とは言えません。必要な機能照明があるだけではなく、光で都市を創り出す試みです。新たに光の道路を敷き、光の空間を広げ、光の文化的なシンボルも象徴的に構成しながら、全く物理的な構造とは別に、光による都市のストラクチャーができて上がるのではないかと提案です。

1992年に策定した「京都光構想」が2年後、京都の遷都1200年祭の企画の中で実現します。古いものをどう受け継ぎ、継続しながら、都市機能はどう新しくするかというテーマを光によって担えないかという提案です。

京都に多くある公開された有名寺院、例えば金閣寺とか、清水寺に至っては今でも非常に活発に夜間拝観という行事をされていますが、そのきっかけとなる企画としてスタートしたのです。各々の寺院には、それぞれ全く個別のプレゼンテーション、プロデュースという経緯をへて、偶然にも企画内容を好意的に理解していただきながら進めてこられたのかなと思っています。

もう一つ、松江市の「光のマスタープラン」というのがございます。

その中で、これは自治体としての市の事業ですから、年間、大きな予算を組むこともできませんし、都市の環境整備といっても道路や土木にかかわることではなくて、観光を軸にした施策というのは、当然予算金額も小さくなっております。私どもに着目された要因というのは、どうやってそれを継続的にその効果をつくり出せるかということが大きなポイントではなかったかと思います。

我々はそのマスタープランというのを、ある都市の光を構築していく上での規制的なルールづくりをするということではなくて、どうやって一般の市民の方々とコネクトするか、それから、どうやって訪れた方々とコネクトするかということ、美しい夜の景観を光を

使って再生する提案をしています。あくまでも予算的な制限は大変大きく影響されますが、都市にもともとあるインフラや文化、景観をうまくつなげて、光の町をつくりましょうというスタンスでございます。その企画の中で、光の持てるさまざまな価値というのを模索しつつ、全体の変わるべき最終的なビジョンというのをつくってまいります。

企画コンセプトには、「時・人・地」といった大きな3つの要素をいかに光でつなぐかということ、中心に据えています。「時」は高い資産価値をもつ歴史と現在から未来へつながる文化情報を意味します。「人」は、もともとそこに住まわれている方、そして訪れてくる方。「地」というのは、長い年月に積層された文化的地域と豊かな自然景観を指します。こうした文化的な膨大な情報を光でどのようにつないでいくかということ、これをテーマとしています。

現在はマスタープランのコンセプトに基づき、「松江水燈路」というイベントが実施されています。9月、秋に松江市で光の単独のイベントとして、恒例化してまいりまして、昨年度に至っては、観光集客インパクトとしては約8万人ぐらいの方が来られたとも言われております。

実はこの松江のイベントを通じて私が強く感じているのは、この光事業の新しい部分というのは、「京都光構想」の中でテーマとしていた光による視覚的な新しい都市構造の再生、が試みえられている点です。それには歴史を物語る情報も持ち、あるいは地域と地域をつなぐライフラインのような役割もありと光によって新しい都市の形が作られているということです。松江城の外周ぐるり1周、水のお堀がございまして、そこに小さな屋形船の遊覧船が走っています。

公職を退職された方々が、新たに船舶の免許を取得されたり、あるいはもともと宍道湖や外洋で船を操っていた方々が来られて、観光遊覧を行っておられます。

私は、その船にぜひ光を積んでもらうよう依頼しました。市内のシンボルになっている松江城のお堀全体を照らすには、多分恒久的には十数億の設備投資が必要になるでしょう。それに対して、船で動く光というのは、時間の変化や、あるいは人を運ぶ、あるいは観光としてのアクティビティーに沿って非常にインパクトのある効果になるんじゃないかということが目的です。独自性の構築が今観光の目玉になって、何とか継続しているような状況でございます。

きょうは京都と松江の2つをご紹介いたしました。公的な行政の施策や、民間事業の

場合も、基本的には地域のさまざまな観光事業や商業目的がメインになりますが、我々のアプローチとしては、できるだけその地域の人を巻き込んで活性する。つまり、事業形態がトップダウンというよりもボトムアップ的なことが多くて、最終的にはそのフィーリングによって市民参加につながっていくような波及効果になるように願っております。

きょうコンテンツの中でも、後半のテーマに「2つの出来事より」というテーマがございいますが、冒頭にご説明しましたように、私が最近一個人のデザイナーとして感じたことを、この出来事を通して少しお話をしたいと思っております。

1966年、フィレンツェに未曾有の大洪水が起きます。花の都は都市一面が文化財で埋め尽くされている。それが軒を越えて水が浸透して、アルノ川が大はんらんを起こしたんですが、そのときに、被災当日を含めて、世界中から何万人という若いボランティアが集まったというお話がございます。

私はその映像を見て、日本はこれだけの純粋な文化を継承して、世界的にもだれにも負けない、だれにもこびることはない大きな歴史を持っていながら、どれだけ愛されているかという、自信が持てるだろうかということを考えてみました。

最後のテーマとして、都市のホスピタリティーについて話をします。

実は照明というのは、太陽には何事をも満たない光だと思われていますが、私は電気の照明こそは、人間が自分自身でスイッチオンする媒体だと思っていまして、この人工照明だけは、人の意思によってのみ点灯される宿命にあります。そういう意味で、光の仕事を通して、何かその大切なものを表現するという、プレゼンテーションできるということにおいて言うと、大変大きな役割を担うのではないかと感じてやまないのです。

都市のホスピタリティーに触れる件に関してフィレンツェに戻りますと、なぜヨーロッパの人たち、あるいは世界中の人たちがフィレンツェに駆けつけたかということ、その都市を訪れる人たちへのウェルカムフィーリング、つまりホスピタリティーを慕って集ったとって過言ではないといえるのではないのでしょうか。文化や財産を平等に所有し、みんなが均等にその文化と宝物を同じように所有している感覚と、その宝物をたくさんの人に見ていただく喜びと、そのオープンマインドと、それらを包括する安全性、そういった感覚が、実は光が担っている都市の役割に非常に近いのではないかと私は常に考えております。
(以下省略)

【座長】 ありがとうございます。最先端の光のデザインの話と、光デザインのコンセプトの話でした。

【座長代理】 非常にアーティスティックな光のデザインで、素晴らしいと思うんですけども、今お話の中で、これは全部失敗例だとおっしゃいましたが、それはまだご自身がイメージされていることと、現実的にできるところで、例えば技術的な問題だとか、いろいろな問題でやっぱり制約があって、イメージが現実のプロジェクトとしてなかなか達成できないとかいう意味なんでしょうか。

【講演者】 デザインというのは、一人の発想のもとにさまざまな協働者というか、共鳴していただく方があって、私がひとりでやったように説明していますが、これは私がなしたというよりも、その協力者、工事業者、非常に高い性能を持った器具を供給する役割の方とか、そういった総合力で出来上がるのが結果といえます。

私がきょうあえて失敗と言っているのは、実は、先ほどご説明した京都の光構想にしても、それから、常にライティングの中に込めたい大きな目的ということに関して言うと、もちろん常にそれが満たされているわけではないという意味でお話しています。さらに光が、もっと大きな意味では、私の手にかかる以上に本来なら役割を果たせるはずなのにと、いう意味で、あえて失敗というふうに言わせていただきました。

【座長】 今、ライティングデザインは約50年ぐらいの歴史と最初におっしゃいましたけれども、日本の長い歴史の中では、屋内の照明は別として、こういう公共空間の照明というようなものは、日本人は意識していたんでしょうか。

【講演者】 デザインの職能やフィールドが、あくまでも最初は商業な目的からスタートしていますので、もちろんもっと長い歴史の中にあると思いますが、私の説明したのは、ライティングデザイナーという職能が存在しているということの認識が社会的にはっきりしてから約50年ぐらいになるのではないのでしょうかということをお話ししたつもりです。

光に関して言うならば、私は先ほどスイッチを入れるという例えをしたんですが、残念ながら、我々の生活の中ではオンとオフ、つまりつくつかないかということが光に対して要求される結果となっていますが、実は真っ暗から明るい状態の間に、非常に芸術的な領域が大変多く含まれています。我々は今そこを開拓しようとしている。それについては、一般的な認識とまだ少し隔たりはあるかなと思っていますが、近年に至っては、随分そのご理解が広がってきているのではないかと思います。

【委員】 行政のお仕事だとか都市再生で、光の演出が行われますときに、現実にはお困りになることがたくさんあると思うんです。現実的にはお困りになったり、思いどおりにならないこともたくさんあるのではないかと想像するんですけども、現実につくって

いくときに何かそういったお話、あるいはもう少しこういうふうなことであればもっとできるのと思われることとか、そういうお話を聞かせていただけたらと思うんですが。

【講演者】 まず身近な例としては、もちろん松江も、そのほかのさまざまな文化財もそうですけれども、基本的に大変貴重な宝物であるということで、文化財に認定されますと非常に規制が厳しくなります。これは私は、管理側の面から言うと当然のことだと思っております。例えば光を当てたいという提案をしても、文化財だからできないというようなことの弊害はあり得ます。

ただ、私はその条件のなかで、文化庁への提案とか、原状復帰への申請を繰り返しているんですけども、基本的に通常の電気の恒久施設というのは、地面より60センチ掘って埋め込まなきゃいけないんです。その60センチの中にどれだけの文化遺跡があるかという、はかり知れないことになるので、当然埋設工事というのは基本的には不可能になります。

そういった意味の条件も含めて、短期・仮設などのテンポラリーな形のイベントでしか実現できないのかなとも思いますが、それは古い建築ではありますが、こういった文化が1つのステージ、舞台として、いろいろな新しいソースを受け入れるという意味では、何か恒久的にできないということを弊害と思っているわけではございません。

国宝に至っては、電気配線も一切不可な場合がありますが、そこについては光ファイバーを使うということで承認を得ました。また、境内全体をろうそくだけで照明をした例がありますが、消防署の立ち会いで、きちっとしたオペレーションをかけるということを前提に実現したこともあります。

しいて言うならば、文化価値を表現する可能性に対して寛容で前向きに、役割の異なる行政機関が協調的になっていただければ、よりスムーズにその機会を増やすことも多くなるでしょう。日本の文化は多彩な情報価値をもった世界に類をみない豊かなもの。その真価をいかに上質にプレゼンテーションし、その価値を理解しあうためのホスピタリティーを高めることは国の経済力をいじすることに匹敵する重要な行為だと確信しています。

【座長】 光のデザインということで、日本の伝統とヨーロッパの伝統といいますか、デザインの手法と比べて、特徴的な違いというのは何かあるわけでございますか。

【講演者】 これは難しいんですけども、例えば今こういった会場で私が浴びている光というのは、この部屋全体に行き渡る非常に明るい照明なんですね。公的な空間では、部屋の隅々まで光が行き渡ってないといけないと考えられています。

ただ、一般家庭に帰ったときに、やはり同じような乳白の板に白い蛍光灯が1個入っている。私は日本の家庭内の会話とか、それから、例えば狭い住環境の中で、夫婦の会話として、何となく父ちゃんが邪魔くさいようなことを言われるのは、実はその人のパーソナルな原因ではなくて、光のせいじゃないかと思っています。

要するに全部見えているということは、その人のテリトリーに相手がいるという意識になるんですね。視覚的にはお互いにそう思っている。ところがこれを1回、2つの光の輪にしてあげると、とっても楽になるんです。おのおのテリトリーをつくり適度に干渉せず相手を大切に感じる環境づくりをするということです。たとえば家族の団欒の部屋には家族の人数分の照明を入れてくださいとお願いしています。

これは生活行為の中でもプライバシーを尊重するという感覚につながっていますし、個の主張とともに相手に寛容である哲学をも培っています。日本の団欒が「和」をテーマとして一つの明かりのもとに均質で画一的な環境に順ずることを良しとしてきた生活環境の歴史が長かったといえますが、そもそも「思いやり」とは相手の心中やシチュエーションを以下に想像するかというイメージの能力のことですから、相手を取り巻く世界観をつくりえない光環境はきっぱりと否定していかなくてはならないと思います。あたえられた環境を受け入れやすい我々の性格の問題もあると思いますけれども、私は大変大きな差だと考えていますし、特に子供達には将来にわたり大きく影響がでる好ましくない環境といえますので残念だなと思うことが結構多かったです。

【座長】 パーソナル照明の勧めということでございますね。

いかがでございましょうか。はい、どうぞ。

【委員】 松江での仕事について質問します。よく言えばそれぞれの専門家に頼んでいるんでしょうけれども、お互いの仕事がなかなか連携できないというか、ここは行政のほんとうにまずいところじゃないかなと私は思っているんです。

その都市にいろいろな専門家を集めてトータルにやってもらったらどうだろうという発想がすごく欠けているような気がするんです。そういう観点から見るとどうでしたか。

【講演者】 対行政のお仕事というのは、デザイナーとして実はもう少しかわり方を変えていかなきゃいけないなということを感じています。例えばコーディネーターとして。自治体の独自の施策が、観光事業にどんどんシフトせざるを得ない状況は、これはもう他に選択肢がないぐらい明らかな話です。ただしその観光事業が日本全国画一的では困るわけです。その中で、光に着目されたというのは、各々の独自性を尊重するためにも正しい

選択肢だとかんがえます。実は水燈路の企画というのは、市の光のマスタープランに基づいたコンセプトを共有し、あらゆる可能性が提案されています。一個一個の規制ルールをつくろうということではなくて、一個一個のクリエイティビティーつまり可能性の追求にあると考えます。そういう意味では多くのエキスパートが光の表現の中に集うなんてことは最も理想的な姿といえると思います。

【委員】 それを機にいろいろな分野に、広げていこうとして、マスタープランをつくったと思います。そういうことに対して、自治体の人が、どういうふうにとめて展開するのかなど。それがなかなか展開していかない。

【講演者】 そうですね。実は、観光事業で言うと、光だけで人を集めるというのは、ほとんどうまくいかないんです。光を照らすだけではなく、それを受け入れるさまざまなサービス、ホスピタリティーが並走しないとだめだということは常にアピールしてきて、少しずつですけども、一つのお祭りということを軸に、飲食が少しずつ町として協力したり、民間の有志や青年グループ、商工会議所などが、この企画にジョイントをしてきたりということは少しずつではありますが見られつようになってきました。

【委員】 それをもう少し発展させると、他にパートナーを見つけて、それは飲食のパートナーなのか、ほかの観光分野に強いパートナーなのかわかりませんが、それで仕事をやったということはあるんですか。何かそういうのが必要なのかなと強く思います。

【講演者】 もっといろいろな意味でのクリエイターが協働すべきだという意味合いですよね。おっしゃるとおりだと思います。そういう企画がなかなか進行しない理由というのは、多分、実行すべきシステムが、それぞれ細分化されているということが大きな原因かと思います。

【座長】 光のデザインを、音のデザインと連携させたりするのですか。

【講演者】 はい。クリエイティブな表現を広げるいみでも、音に追随するというようなことは常にコラボレーションしていて、全体の企画コンセプトの立案から、デザインをして、スペシャリストと協働する。クリエイターコラボレーションとしては音楽家と一緒に、光のコンセプトに基づいて音楽をつくっていただくこともやっています。

【委員】 光だけで観光だとか都市再生というのはできるものでもないのかもしれませんが、しかし、ほんとうに光がつくり出してくれる別世界というのはほんとうにすばらしいものです。

アーティストとして、どちらかというところ、オファーがあつてお仕事をなさるケースが多

いのかもしれないんですけれども、こういうのに一度チャレンジしてみたいな、デザイナーとして非常に意欲がわくというようなのはございますか。

【講演者】 地域デザインの中で、我々がこのライティングでできていることとは、さまざまな関係性をいろいろ取り巻いていく中で実行していかなくちゃいけない。日本の、世界に向けて誇れる顔を、できれば光で表現をしたいなど。これは、実は物ではございませんで、まさに作法やおもてなしという領域の空間表現の一つではないかと思っています。

もう一つは、照明というのは電気で、電線でつながってしまして、そういう意味では、家電製品とは全然違う経路で育ってきています。照明というのは、インダストリーの世界の中でも全く違うものとして育っていて、手にとれないんですね。私は手の上に載せられるような光ということ、デザインのテーマとして考えたいと思っています。

【座長】 大変おもしろい話をありがとうございました。この辺で終了させていただきます。

— 了 —